

■インタビュー・金賢玉さんに聞く

日本軍「慰安婦」問題解決と統一への思いを胸に

―裴奉奇ハルモニと過ごした一七年間を振り返る―

植民地支配下の朝鮮に生まれた裴奉奇ハルモニは、宗主国である日本、その中でも天皇制を護るため本土決戦の「捨て石」とされた沖縄の地に、日本軍「慰安婦」として連行された。裴奉奇ハル

モニにとっては、日本軍敗戦の経験がすなわち自らの朝鮮民族としての解放を意味しなかった。日本敗戦後は米軍に収容され、故郷に帰る機会も得られず収容所を逃げるも、そこは支配する者が米軍に取って代わっただけの異郷であった。食事と寝床のために性をも売らざるを得ず、街から街へと孤独に歩き続ける毎日。慰安所生活よりもつらかったという。

の地に足を踏み入れられたのは、一九七二年の沖縄「復帰」直後であり、その目的は沖縄戦での朝鮮人強制連行真相調査であった。この調査終了に続いて在日朝鮮人総聯合会沖縄県本部が設立され、その専従活動家として沖縄に赴任したのが金賢玉さんであった。

沖縄「復帰」後、引き合わされるようにならなは出会った。しかし、激しい沖縄戦と戦後の孤独を生き抜いた裴奉奇ハルモニは、すでに身体も精神も極限状態にあった。人を回避し、首を突き刺したい衝動に駆られたほどの裴奉奇ハルモニに、金賢玉さんはどのように寄り添ったのか。朝鮮の解放も分断も知らぬまま生きた裴奉奇ハルモニが、金賢玉さんと共に晩年抱いた願いとは――。一七年間、裴奉奇ハルモニと共に過ごした金賢玉さんにお話を伺った。



■裴奉奇ハルモニに出会うまで

私は一九四二年に兵庫県で生まれました。小学校に入る前は朝鮮人がやっていた神戸の青空教室に通っており、朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）が一九四八年に建国された翌年、東神戸朝鮮小学校に入学しました。阪神教育闘争時、学校を守るために皆が必死に闘っていた当時の様子は今も記憶に強く残っています。中学、高校は神戸朝鮮中高級学校に通いました。

高校生のときに共和国への帰国運動が始まり、在日本朝鮮青年同盟の朝高委員会の活動として岡山県の新見にいる同胞たちを訪ねに行くと、そこ

の同胞たちが「朝鮮語のできる同胞学生が来たぞ」と家々で歓迎してくれたことが今でも思い出されます。当時は高校まで通ったら高学歴だったわけですね。

より多く学ぶために共和国へ帰国したい気持ちもありましたが、高校まで学んだ者の責務として、結果的に帰国はせずに在日朝鮮人運動に尽力する決意をもって高校を卒業しました。

高校卒業後は二年ほど在日本朝鮮青年同盟の活動家として働き、その後、朝鮮大学校に進学し、大学卒業後は神戸朝鮮中高級学校で教師として、

在日本朝鮮女性同盟の活動家として務めました。

そしてちょうど四〇年前の一九七二年、沖縄の施政権が米国から日本に移った年に、私は在日本朝鮮人総聯合会（以下、総聯）沖縄県本部の専従活動家として、同年に結婚した連れ合いの金洙燮と一緒に沖縄に赴任しました。それまで沖縄は米国の施政権下にあつたために、在日朝鮮人運動においても沖縄は二十七年間、切り離されていたわけです。初めて乗った飛行機を降りて見た沖縄は基地の街で、その現実が胸が痛みました。

沖縄に赴任後、私たち総聯沖縄県本部の活動家たちは、同胞を探し訪ねることから始めました。家々の表札を一軒一軒見てまわりながら、在日朝鮮人の現状把握に努めました。当時は「金城」という姓が沖縄人に固有なもの知らず、「金」がつくから朝鮮人かもしれない」と思い、金城という姓の家を訪ねたものです。

当時は、一九七二年八月一日に沖縄で結成された「第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺調査団」のメンバーが、沖縄県や那覇市、住民たちの協力を得て、沖縄戦に強制連行された朝鮮人の被害実態を調査し、その成果も発表された後だったので、私たちの活動にも沖縄の人々はとても協

力的でした。そうした活動を通じて、当時探し訪ねることのできた在日朝鮮人の数は一〇名足らずでした。そのときは裴奉奇ハルモニと出会うことはできませんでした。しかし一九七五年、戦後長らく無国籍のままに沖縄にいた元「慰安婦」の方が、特別在留許可を受けるといふ情報を沖縄の方から聞き、そのことがきっかけで裴奉奇ハルモニと出会うようになりました。

■同胞として裴奉奇ハルモニに出会う

初めて裴奉奇ハルモニに出会ったときは、胸が痛みました。当時裴奉奇ハルモニが住んでいたのは、佐敷町のさとうきび畑の中にひっそりと建つ物置小屋でした。窓もなく、立てば頭が天井を打つ畳二枚ほどの小さな部屋で、裴奉奇ハルモニは小屋中のありとあらゆる隙間をたばこの銀紙でふさいでいました。吊るしに干してある洗濯物は、布巾も雑巾もどっか分からないくらい、きれいに真っ白く洗っていました。私自身、幼い頃から洗濯物を叩いたり炊いたりして清潔にしていた同胞たちの姿を見ていましたから、その洗濯物を見て「ここに朝鮮人がいるんだなあ」という気持ちになりました。また私自身、若い朝鮮女性として

金賢玉(キム・ヒョノク)さん
1942年、兵庫県生まれ。朝鮮大学校卒業。沖縄県那覇市在住。1972年、沖縄の本土「復帰」直後に在日本朝鮮人総聯合会の沖縄県本部活動家として沖縄に渡り、在日朝鮮人の権利擁護運動に取り組む。1975年に裴奉奇ハルモニと出会い、以後17年間、裴奉奇ハルモニと親交を深めた。

1 一九七二年の沖縄「復帰」を契機として、沖縄戦に強制連行された朝鮮人に対する虐待・虐殺の実態と真相を調査した。調査団は弁護士尾崎隆を団長として八名(朝鮮人日本人各四名)で結成。調査期間は同年八月一日〜九月六日。その成果は、同年一〇月に『第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺調査団報告書』として発表されている。
2 一九七二年の本土「復帰」にともない、沖縄にいる外国人にも在留資格の取得が義務付けられた。しかし読み書きのできない裴奉奇ハルモニは定められた期間内に在留資格の取得ができるかどうか、非正規滞在者として強制送還されるのではないかと不安を長らく抱えていた。しかし以前働いていた料理屋の日本人の手伝いを受けて在留資格申請を行い、一九七五年に特別在留許可を受けた。



裴奉奇ハルモニが初めて被害を告発した朝鮮新報記事(1977.4.23)

て取材をするものだから、裴奉奇ハルモニ自身は突然来られて勝手に取材されて、ストレスが溜まっていくわけです。取材者は取材して帰ったらそれで終わりですが、裴奉奇ハルモニはそういった取材後は決まって一週間ほど体調が悪くて寝込んでいました。そんなときは裴奉奇ハルモニが好きだった朝鮮人参のお酒を持って行きました。

裴奉奇ハルモニは戦後、身を切り売りしながら生きていかざるをえなかった。生きるために身を売ったとしても「落ち着かん」と言って同じ場所に定着できず、一日を終えたら翌日逃げ出していくといった放浪生活を過ごしていました。日々の糧が大変で、ある日は野菜を売って、またある日

は空き瓶を集めている裴奉奇ハルモニを見た方もいます。そのような日々を過ごす中で、精神的に病んでしまっただけです。

あるとき、顔を出さないという条件で裴奉奇ハルモニがテレビの取材を受けたことがあるのですが、何かの拍子で顔が出てしまい、近所の人々が、何かの拍子で顔が出てしまい、近所の人々が裴奉奇ハルモニが「慰安婦」だったということが知れてしまったんです。それで大人たちが後ろ指をさすから、近所の子どもたちも裴奉奇ハルモニに石を投げたりして、裴奉奇ハルモニはよく頭に絆創膏を付けていました。そんな痛ましいことがあった頃、裴奉奇ハルモニは那覇のど真ん中やあちこちを歩きながら「ナナン チョソンサラミダ(私は朝鮮人だ)」と叫びまくっていたそうです。

その姿を見た人が私たちに後で教えてくれたんですが、その話を聞いたときも本当に胸が痛みました。

■「バルチャ」を呪って

裴奉奇ハルモニが特別在留許可を受けて外国人登録をしたことです。外国人登録証の切替が四年(注：当時)に一度必要だと知ると、読み書きが出来ない裴奉奇ハルモニは何度も切替の時期を確かめて、一緒についていくから大丈夫と私がいくら言っても、切替の一年前や一ヶ月前から心配するんです。それで切替時についていくと、市役所の職員に会った途端に頭を下げて、やり取りを一つするごとに頭をぺこぺこするんです。戦

前の朝鮮人は役所の日本人に対してはみんなそうだったのだらうとも思いますが、ましてや読み書きもできず、異国で、履き古しの靴のように捨てられて、女ひとり生き抜いてきた裴奉奇ハルモニはどれだけ大変だったろうと思つくと、また胸が痛みました。「アジメ(注：朝鮮語でおばさんの意)、そんなに頭下げなくていいよ、今は日本人も朝鮮人も昔と違うよ。沖縄人も昔とは違うんだよ」と言つても、裴奉奇ハルモニは「そうね?」と言いつつまた頭を下げていました。

裴奉奇ハルモニは、出会った当初は朝鮮語も忘れ、朝鮮の食べ物も忘れ、朝鮮料理もつくるのが出来ずに、油気がない料理を簡単に作り、あとは買って食べるという生活でした。また、裴奉奇ハルモニは最初の頃、ことあるごとに「友軍(注：日本軍のこと)が負けて悔しいさあ」と言っていました。日本軍の「慰安婦」とされてきた裴奉奇ハルモニには、日本軍が勝たないと自分が生き延びられないという気持ちがあつたんです。裴奉奇ハルモニは朝鮮の解放の事実も知らないまま長きを過ごし、朝鮮半島が南北に分割されたことも知りませんでした。裴奉奇ハルモニには祖国解放の喜びも何もなかったわけです。日本軍「慰安婦」として連行され沖縄戦を命からがら生き延び、日本の敗戦後も、生きるために沖縄の料理屋を転々としながら身も売らざるをえなかった裴奉奇ハルモニは、私たちと出会うまで、戦争中よりも戦争後にひとり暮らしていたとき

裴奉奇(ペ・ボンギ)ハルモニ

- ・1914年、忠清南道礼山郡生まれ。父は他の農家に作男として雇われ一緒に暮らしたことはなく、母・姉・弟と四人で暮らす。6歳の頃、祖母が亡くなり姉は奉公に出され、母は突然いなくなり、弟もどこかへ預けられた。その後は父の実家に引き取られるが奉公に出され転々とし、17歳で結婚するも夫が出稼ぎから帰らず、2年足らずで家を出る。その後結婚した夫も貧しく、家庭を築けずに再び家を出た。
- ・1943年、興南の街で日本人と朝鮮人の「女紹介人」に声をかけられ「仕事せずに金儲かるところがある。口を開けて寝ていたら、バナナが落ちて口に入る」という話にだまされ、60名ほどの女性たちと共に釜山から下関へと連れて行かれる。
- ・1944年11月、日本軍の輸送船に乗せられ、米軍の空襲で焼け野原となった那覇で降ろされ、その後渡嘉敷島へ連れて行かれる。渡嘉敷港近くの赤瓦の家の慰安所で「アキコ」という源氏名で呼ばれながら、他の六名の朝鮮女性と共に日本軍「慰安婦」としての生活を強いられ、多いときは一日20〜30名位の相手をさせられた。
- ・1945年3月23日、米軍による爆撃を受け、空襲と艦砲射撃が繰り返される中、山中の日本軍部隊陣地の炊事班に入れられ、飢えに苦しみながら戦火を生き延びる。同年8月26日の日本軍による武装解除後、米軍の捕虜となり沖縄本島の石川収容所に入れられる。収容所から逃げた後は、小さな風呂敷包みと地下足袋一足のみを手に放浪生活を送る。知人もなく言葉も通じずお金もない中、生きるために沖縄中を転々としながら、酔客を相手に身も売らざるをえず、子守りや野菜売り、空き瓶集めなどしながら過ごす。
- ・沖縄「復帰」3年後の1975年、「強制送還」になるとの話を聞き入国管理局に出向き、特別在留許可を受ける。これがきっかけでその存在が知られるようになり、1977年4月、『朝鮮新報』紙上で初めて自らの日本軍「慰安婦」としての被害を生き証人として告発するに至る。
- ・金賢玉さん夫妻とは1975年に出会い、以後、息を引き取るまで家族のように親交を深めた。
- ・1991年10月、死去。



裴奉奇ハルモニの姿を見ながら、裴奉奇ハルモニが「慰安婦」であったからではなく、朝鮮の同胞として、日本の植民地支配によって亡国の民となった朝鮮人の中でも、最も苦しい、日本軍の「慰安婦」という経験を強いられた朝鮮女性の不幸な姿を見て本当に胸が痛んで、なんとかしなければならぬ、これから裴奉奇ハルモニと共に生きていかねばならないと、強く思いました。

■「ナナン チョソンサラミダ」

裴奉奇ハルモニは、気分の良い日は部屋に入れてくれてお茶や駄菓子を出してくれて、私とうちの金(注：お連れ合いの金珠さんのこと)もキムチを持って行って一緒に食べたりました。でも気分の悪い日は、前もって約束した日にちに訪ねても「何しに来た、気分悪い、帰れ!」と言われ断られたことが何回もあります。そんなときはあとで「やつあたりしてごめんね」と言われたりしたんですけど、あのときは裴奉奇ハルモニがまだ精神的に落ち着いていなくて、頻繁に気分が悪くなったんです。ある日は、さとうきび畑の向こうからわめき声が聞こえてきて、あの密封された小屋で裴奉奇ハルモニが片手鍋を出刃包丁で叩きながら叫んでいました。

また、裴奉奇ハルモニの存在が広く知られるようになって、裴奉奇ハルモニは国内外から取材攻めになったのですが、取材者の多くは自分たちの都合に合わせて、裴奉奇ハルモニの事情を無視し

りにある一番有名な宝石店に金と三人で指輪を買いに行つたんです。国際通りを三人で散歩するとき、裴奉奇ハルモ二はいつも金と腕を組んで歩いていました。宝石店で裴奉奇ハルモ二はこれはいやだ、あれはいやだと言いながら、最終的に金色の指輪を買いました。私が「持って帰る？ して帰る？」と聞いたら「して帰ろう」と言つて左手の薬指に指輪をはめて、その後の食事会で私が料理の準備をしている間、嬉しそうにずっと左手を眺めていました。

■「ウォンスルル カップダララ」

一九八九年、昭和天皇が死んだときのことです。そのニュースをテレビで聞いたとき、裴奉奇ハルモ二は「え、なぜね。謝りもせんと逝きよつて」とぼろりと言つたんです。私たちは裴奉奇ハルモ二の口からそんな言葉が出てくるなんて想像してないものだから、びっくりしました。それで裴奉奇ハルモ二に昭和天皇に具体的に何をしてほしいのかと聞いたら「謝つてほしいさ」と言うわけです。その頃から、裴奉奇ハルモ二は私たちに「ウォンスルル カップダララ」(かたきを討つてくれ)と朝鮮語で繰り返し言うようになっていました。また、自分も苦労したけれども強制連行された男たちの方が自分よりもっと苦労した、土堀りして弾受けになつてもっといじめられた。その人たちの苦労を忘れたらいかん、早く解決してほしい、悔しい……というのも裴奉奇ハルモ二がよく

く言つていたことでした。

亡国の民として「同化」され「皇国臣民」になつて、「友軍が負けて悔しいさあ」とあれだけ言つていた姿をずっと目の当たりにしてきたものから、裴奉奇ハルモ二がそのように言つたときは、あの裴奉奇ハルモ二がこんなことを言うようになるとは……と思ひ胸がいっぱいになりました。

■統一への思い

一九八八年、ソウル・オリンピックのとき、裴奉奇ハルモ二についての記事を書いた石飛仁さんという記者が久しぶりに訪ねてきて、うちの事務所と一緒に宴会をしたときのことです。石飛さんが裴奉奇ハルモ二に「韓国もオリンピックするまじか」と提案したんです。旅行費は石飛さんの会社がすべて持つからということ。すると裴奉奇ハルモ二は「うーん、行きたいねえ」と言うんですね。うちの事務所に朝鮮半島の大きな地図がありました。裴奉奇ハルモ二は読み書きが出来なかつたけれども、いつも新礼院というところを指さして、自分の故郷はここだと言つていました。そのときもそんな風に裴奉奇ハルモ二が地図を指さしていたら、石飛さんと一緒に来たカメラマンの藤崎さんが、自分も幼い頃は新礼院の山を見て育つたんだと言つたんです。それでその場が盛り上がり、それならなおいいじゃない、一緒に行くよという話になつたんです。

金が「統一するよ。統一して一緒に帰ればいいさあ」と言つたときによく、裴奉奇ハルモ二はこっくり頷いて泣き止んだんです。

一九八九年には「統一の花」と呼ばれた林秀卿(イムスウク)が第一三回世界青年学生少年祝典のために、長い時間をかけて平壤の飛行場に降り立つたとき、事務所を折り返しながらその場面をテレビでたまたま一緒に見たんです。かつて韓国で光州事件があったとき、裴奉奇ハルモ二は軍事独裁政権による蛮行をテレビでみながら、毎日怒りに燃えていました。しかし林秀卿がテレビで、死も覚悟して統一のために来たんだと平壤で堂々と発言する姿をみて、裴奉奇ハルモ二がほんとうにうれしきあと言いつつ涙を流すもんだから、私もきつと統一できるよと言いつつ、ふたりきりで泣いたことを覚えています。

その後、一九九〇年に朝日関係が一気に改善へと進んで三党共同宣言³が出たとき、裴奉奇ハルモ二はそのニュースを何よりも喜んでいました。裴奉奇ハルモ二はそのときすでに、朝鮮がなぜ植民地にされ南北に分断されたのか、自分の人生は運命なんかじゃないんだ、日本の植民地政策によるものであり、国を奪われた民はこうなるんだということを、自らの力でしっかりと飲み込んで

で、体で覚えて理解していたように思います。だからこそ、朝日会談の実現を心から喜んでいました。「統一したら三人で一緒に帰ろうね」というのが、いつしか私たち三人の合言葉になっていました。そうした統一への確信を胸に、希望のうちに裴奉奇ハルモ二が亡くなったのは、不幸中の幸いだったと思います。晩年は、裴奉奇ハルモ二が自身の人生を、民族の魂を、ひとつひとつ取り返して変わっていく姿をみながら、私自身も大変喜びながら一緒に過ごしました。

裴奉奇ハルモ二は生きていたら二〇一四年に一〇〇歳を迎えることになりましたが、それまでに朝日関係がよくなれば、ハルモ二はきつと喜ぶと思います。

■裴奉奇ハルモ二と金学順ハルモ二のバトンタッチ

裴奉奇ハルモ二が亡くなった年(注：一九九一年)は、沖縄も特別暑い年でした。裴奉奇ハルモ二もその暑さで参つていたので、私は裴奉奇ハルモ二に入院を勧めたのですが、ハルモ二は病院嫌いでかたくなに拒否していました。裴奉奇ハルモ二が唯一行っていた病院も歩いて行くには遠くタクシー代もかかったので、歩いて通える病院

ると裴奉奇ハルモ二は「行きたいけど、行けないさあ」と言いながら、途端に涙をぼろぼろ流したんです。なんで行けないのかと尋ねたら「だつて、向こうにも米軍基地があるじゃない」と。自分が生まれ故郷よりも長く住んでいる沖縄には巨大な米軍基地がある。自分の故郷にもまた米軍基地があり、民族は南北に分断されたまま、帰つたとしてもどうすることも出来ない。朝鮮が統一し、外国の軍隊が出て行ったときに帰るんだ、そう言いながら裴奉奇ハルモ二は泣いていました。うちの



朝鮮半島地図をみて自分の故郷を指さす裴奉奇ハルモ二(1988年)

に変えられるよう、担当のケースワーカーに頼んでいました。

裴奉奇ハルモ二の誕生日は旧暦の九月七日なので、毎年一〇月頃にささやかな誕生日のお祝いをしていました。その年はちょうど裴奉奇ハルモ二が七七歳を迎える喜寿だったので、参鶏湯(サムゲタン)をこしらえて、一〇月二日の誕生日を、少し早めの一〇月七日に金と三人で祝つたんです。そのときに「アジメ、九日か一日に一緒に病院に行こうね」と言うのと裴奉奇ハルモ二は「二〇日は、一〇一〇(じゅうじゅう) 空襲だから行けないんだね」と言つたんです。これが、裴奉奇ハルモ二と交わした最後の会話でした。「一〇一〇空襲」は沖縄戦のときに米軍が那覇に総攻撃を仕掛けた、沖縄にとっては忘れられない日です。裴奉奇ハルモ二はこの「一〇一〇空襲」の翌月に沖縄に連行されたのですが、空襲で廃墟となった沖縄を記憶しているんです。

その頃は裴奉奇ハルモ二の体調が悪くて心配でしたから、金と交代で毎日裴奉奇ハルモ二の家に行き、電気がついているかなどを見に行っていました。そうして何日も経たないうちに、ケースワーカーの方から「裴さんの家の戸をたたいても返事が無い」と電話があつたんですね。それですぐ

3 「日朝関係に関する日本の自由民主党、日本社会党、朝鮮労働党の共同宣言」。金丸信を団長とする自由民主党代表団、田辺誠を団長とする朝鮮労働党代表団間で行われた三党共同会談の結果、一九九〇年九月二八日に調印された。朝鮮民主主義人民共和国に対する日本の公式的な謝罪と償い、朝日間の国交関係樹立、在日朝鮮人の人権と民族的諸権利、法的地位の保証などについて盛り込まれ、その後の朝日国交正常化交渉開始のきっかけとなった。

とのないようになければならないと思います。解放された祖国があるからこそ今日がありますし、二度と失われないようになければなりません。平穏は自らやってみせませんし、権利はひとつずつ自らが勝ち取るための努力をしなければならぬと思います。「高校無償化」制度からの朝鮮学校除外の問題のように、現在も日本政府による在日朝鮮人に対する弾圧が続いて困難がありますが、人権を守るために、解放直後のようにがんばらなければなりません。

日本の植民地主義が清算されないがために、現在も在日朝鮮人に対する弾圧が存在するということを、若い世代は肝に銘じなければなりません。植民地主義者たちは、いつか来た道をまた戻ろうとしています。「ウォンスルル カップパダララ」という裴奉奇ハルモニの遺言を思い出し、日本の歴史清算が必ず果たされなければならないと思います。

問題意識を持つてこそ、困難にも負けずに進むことができます。若い人々が民族の誇りを持って、統一世代として同じ民族同士で団結し、心ある日本人とも手をつないで、新しい歴史をつくる創造者になってほしいと思います。

■ありがとうございました。



故郷に行きたいが行けないと涙する裴奉奇ハルモニ(1988年)

に裴奉奇ハルモニのアパートに駆けつけたのですが鍵が閉まっているので、すぐ不動産屋に鍵を借りに行つてドアを開けると、真っ白に洗ったシーツと、きつちりたたんだ布団の上に足を上げて、まるで休息しているかのような姿で、裴奉奇ハルモニは亡くなっていました。左手には一緒に買った金色の指輪がはめられていました。

裴奉奇ハルモニのお葬式は、裴奉奇ハルモニと関わりのあった人たちに連絡をして、来られた方々と一緒に行いました。二月六日に追悼式の

形で四十九日を行ったのですが、その日がちょうど韓国の金学順ハルモニが日本政府を相手に提訴をした日で、金学順ハルモニが追悼式に一万円を送つてくださったんです。裴奉奇ハルモニと南の方々とのバトンタッチでした。そういう形で裴奉奇ハルモニの意思がひとつの点となって、その点と線となって、その後だんだんとあちこちで問題意識を持つ人たちが増えていったことに、私自身とても喜びを感じています。

■最も弱き人々のために

私が裴奉奇ハルモニと過ごした日々のは、何も自慢げに言う話ではありません。私がかんばつたのではなく、裴奉奇ハルモニ自身が、私の言うことではなく自らの体験や見聞をもって、人権を自分で取り戻した。これが一番大事なことではないかと思えます。私たちは幼い頃から歴史を学んでいるし、同胞社会の中で朝鮮語も話しますよね。でも裴奉奇ハルモニはそうではありませんでした。日本軍「慰安婦」として強いられた生活を想像しただけでも苦しいのに、その頃よりも、私たちと出会うまでの孤独な生活の方がもっと苦しかったと言われたら、どう思いますか？

裴奉奇ハルモニは満で三〇歳のときに渡嘉敷島に連行されたのですが、私もその歳のときに沖縄に赴任してきました。朝鮮とは気候もまったく違う沖縄の地で、裴奉奇ハルモニが過ごした日々を自分が経験したら…と思わずにはいられなかった

んです。異国でお金も何もない人が孤独に生きるのには男性でも大変なのに、裴奉奇ハルモニがどうやって生き抜いてきたかと思うと…本当に奇跡のようです。

自分が出れることしか出来ませんでした。人を大切に思い、最も弱き人々を、気づいた人が支えなければならぬし、それが自然なことだと思います。

■昨今の歴史歪曲の動きについて金賢玉さんが思われることをお聞かせください

日本が朝鮮の植民地支配の歴史を一〇〇年以上にもわたって一つも反省せず、在日朝鮮人に対する弾圧など、今も同じようなことを繰り返しているのは、日本が歴史の総括をきちんと行なっていないからです。戦争犯罪には時効がないし、きちんとした謝罪と賠償を通じて必ず清算されなければなりません。意識ある人々が声を上げれば、大きな力になっていくと思えます。沖縄の民衆たちも、アメとムチの政策の中で引き裂かれ続けていますが、沖縄の問題も含め、日本の政策はきちんと清算されなければならない。南の民主化闘争もそうでしたが、いつの時代も人々が意識を持って声を上げて闘わなければならないと思います。

■最後に、読者へのメッセージをどうぞ

誰もが自らの歴史、自らの文化をきちんと知って、私たちの子孫が二度と国や言葉を奪われるこ

◆インタビューを終えて◆

日本軍「慰安婦」問題を解決するための動きについて語る時、一九九一年の韓国・金学順ハルモニの日本政府提訴がスタート地点として語られることが多い。日本軍「慰安婦」制度による被害をもって日本政府を相手に初めて訴訟を提起したことはそれ自体、大変意義深い出来事であったのには間違いない。

しかしその一四年前、日本軍「慰安婦」制度の被害当事者が誰ひとり口を開けなかった時代、裴奉奇ハルモニが自らの被害を初めて告発したことは特筆されるべきことであろう。そしてその勇気ある告発は、金賢玉さんたちによる裴奉奇ハルモニへの寄り添いがなければ実現されなかった。

インタビュー中、金賢玉さんは「裴奉奇ハルモニが『慰安婦』だったからではなく、同胞であったから共に過ごした」と何度も語った。訪問を拒絶されることも一、二度ではなかった中で、粘り強く心を近づけるには大変な苦労があったはずだが、金賢玉さんはそのようなことを一つも語らなかつた。「復帰」までは「外国」であった沖縄に赴任し在日朝鮮人を探し訪ね、裴奉奇ハルモニと出会い、一七年という長い期間を通じて親子のような仲になった金賢玉さんの心には、総聯活動家としての確固たる同胞愛が根ざっていた。金賢玉さんにとって裴奉奇ハルモニと共に過ごすことはすなわち、沖縄で長らく取り残されたままであった在日朝鮮人の人権を守ることであったのである。東アジアの冷戦構造を背景とした構造的差別と暴力にさらされ続ける沖縄の地で、本稿で語られたような在日朝鮮人運動が地道に行われたことは、しっかりと記憶されねばならないだろう。

裴奉奇ハルモニが亡くなって二年、日本では相も変わらず歴史修正主義者による暴言が相次ぎ、日本政府は朝鮮民主主義人民共和国と在日朝鮮人への差別政策を強化している。裴奉奇ハルモニが生きておられたら、現在の日本の状況をどう思われるであろうか。裴奉奇ハルモニが強いられた生は、現在の東アジアが抱える矛盾をそのまま映し出している。

裴奉奇ハルモニのいまだ叶わぬ願いを受け継ぎ、日本政府の真の謝罪と賠償による日本軍「慰安婦」問題の解決と、朝鮮半島の平和的統一が必ず果たされなければならないという思いを、一層強くしたインタビューであった。

(人権協会事務局 金優綺)